

JASIS

NEWS

No. 64

2019/5/25

日本インテリア学会会報

■副会長挨拶

平成から令和 1989から2019 1号から64号

副会長 上野義雪

元号が「平成」から「令和」に改元されました。日本インテリア学会の誕生は平成元年（1989年）に遡り、創設30年を迎えました。会報64号の執筆依頼を受け、久しぶりに会報1号から読み返してみると一桁台の会報には、実に大事な記事の記載に驚きを感じました。学会の進むべき方向性が示されているのです。是非お読みください。

「令和」への改元は、多くの意味を含んでおり、その一つに若返りの意味があると考えます。日本インテリア学会は、30年という長い歴史を刻んで参りました。そしてこの30年の歩みは、学会運営の若返りを意味するものと思います。平成に学会誕生、令和に事務局移転、この年号と学会の動きに感慨深いものを感じます。

私の大学退職前に白石光昭先生が総務委員長を担って下さり、白石先生、松崎元先生、そして事務局押切泰子様のご尽力があったからこそこの新たな「令和」を迎えることができたものと思っております。直井先生には、いつもの確かな舵取りに感謝です。

私は、機会がある度に今後の学会運営に、「会員の居場所」づくり、支部活動を初めとする部会や委員会の定常的活動の実践、「産・官・学」一体とする間口を広げた学会、役員若返りと女性役員の登用など、会員目線による対応を訴えて参りました。残念なことです。会員数の減少、会員構成の高齢化が傾向としてみられます。この傾向は、この学会に限ったことではありません。しかし、この状況から脱するには、学会活動の根本的見直しと対応が緊急な課題となります。

これからの学会活動を考える上で私が最も知りたいことは、会員の皆様の生の声をお聞きしたいということです。学会活動は教育と似ており、一方向型ではその役割は果たせません。規模の小さな学会であればこそ双方向型活動が可能になる筈です。学会事務局のメールでも、事務局宛のお手紙でも構いません。是非とも皆様のご意見をお聞かせいただきたい、切に願っております。

会報の発行は、棒田広報委員長のご尽力により、読み応えのある定期的発行が成されております。実に有難いことです。

そして、会報発行には、30年に及ぶ㈱正文社、長谷部様の存在を忘れてはなりません。誠心誠意に感謝です。

この4月に実施されました事務局の金沢移転、引き受けて下さいました棒田先生ならびに北陸支部の皆様へ感謝です。

4月の事務局移転を機に社会貢献に寄与できる学会を目指し、皆様のご協力をお願いし、結びの言葉とさせていただきます。

■第30回日本インテリア学会大会（関東・東京）開催報告

実行委員長 内田和彦（㈱オカムラ）

2018年10月20日（土）、21日（日）の両日、第30回日本インテリア学会大会（関東・東京）を開催いたしました。

久しぶりの関東開催ということもあり、不慣れな中、開催準備を進めてきました。JRの駅から徒歩1分という非常に立地の良い千葉工業大学に会場校をお願いし、白石先生、松崎先生のお二方にも実行委員としてご参加いただき、関東支部幹事OBの先生も巻き込んで見学会、研

究交流懇親会、研究発表、講演会、卒業作品展みなそれぞれに右往左往しながら何とか開催当日を迎えることができました。関東らしさとは何かということを考えることからスタートし、テーマを「最先端」と定め、見学会、講演会を企画しました。

20日の見学会は最先端のリアルなオフィスをご覧いただいてから、大手町に移動し、コワーキングスペースでオフィスデザインの遷移についてワークスケープ・ラボ代表の岸本章弘さんからご講演をいただきました。その後、徒歩で移動し東京駅を眼下に見下ろす丸の内ビルディング5階小岩井フレミナルにて研究交流懇親会を開催いたしました。

21日は千葉工業大学7号館を会場とし、直井英雄大会長に開会のお言葉をいただき、その後各会場での研究発表、パネル発表、卒業作品展が行われ、昼食後には「星のや東京」のデザインと素材をテーマに建築家の東理恵さんにご講演をいただきました。

閉会式では、名誉会員表彰、卒業作品展優秀賞の発表、学生発表奨励賞表彰、感謝状授与が行われました。

いろいろと行き届かない点があったとは思いますが、団結して大会開催まで漕ぎつけることができました。準

備段階におきましては、様々な場面で上野義雪先生に的確なアドバイスを数多くいただきました。実行委員一同を代表いたしまして御礼申し上げます。

各表彰内容を以下に記します。

〈名誉会員表彰〉

河田克博、建部謙治、長山信一、松本直司

(順不同・敬称略)

〈日本インテリア学会 第25回卒業作品展2018審査結果〉

【最優秀作品賞】(1点)

- ・住む人の日常をつくる不満レスな部屋づくり
ワンルームマンションのリノベーションを通じた楽しい生活の研究ー
九州産業大学 工学部 住居・インテリア設計学科
江川詩乃

【優秀作品賞】(3点)

- ・Tutti (トゥッティ)
東京藝術大学 美術学部 デザイン科
高本夏実
- ・skyline tourism (スカイライン ツーリズム)



千葉工業大学



卒業作品展



学生発表奨励賞表彰



開会式



発表会場



名誉会員表彰
(長山信一、河田克博、建部謙治)



企業展示



講演会 (東 理恵さん)



感謝状授与 (押切さん)

芝浦工業大学 デザイン工学部 デザイン工学科 建築
空間デザイン領域

溝口実央

- ・Auberge Komorebi (オベルージュ こもれび)
フェリカ 建築&デザイン専門学校 インテリア設計科
空間デザインコース
村上実千留

【奨励賞／高等学校優秀賞】(1点)

- ・サークルベンチの製作
千葉県立市川工業高等学校 インテリア科
岡村光希、小川瑞月、下野真弥、下野真侑、松原 空
茂木編莉、吉川美希

〈日本インテリア学会 第30回大会 (関東・東京) 学生発表奨励賞2018 審査結果〉

- ・テーブルの形状が利用者に与える心理的影響—家具の寸法と形状に関する実験的研究 その1—
森 亮太 (千葉工業大学大学院)・橋本都子
- ・弾性スギ圧縮木材による平編み加工を施したスツールの開発
沢田信哉 (拓殖大学大学院)・高木拓哉・阿部眞理・白石照美

平成30年10月21日 (日) に開催された第30回大会 (千葉工業大学) 当日の参加理事および各セッションの座長による投票の結果、9名の学生発表者 (準会員) の中から、上記2名が学生発表奨励賞を受賞しました。

〈感謝状授与〉

押切泰子

平成24年度より7年間の長きにわたり日本インテリア学会事務局員として精励され事務局の継続的基盤を作られた功績を表して感謝状が贈られました。

◆見学会を終えて

担当：長山洋子

東京では2020年の東京オリンピック控え、銀座、日比谷、渋谷等々で再開発が急ピッチで行われています。このような状況を鑑みながら、見学会を企画するにあたって大会実行委員会ではコンセプトを「その立地を活かした東京ならではの最新のインテリアを対象とした見学会の開催」としました。そこで働きやすい環境造り、コミュニケーションの活性化、知的創造活動の誘発などのコンセプトに則ったインテリアが注目されているオフィスに着目しました。特に「日経ニューオフィス賞」受賞作品は、創意と工夫をこらしたオフィスが表彰されていることから、その受賞作品を見学対象にしたいと考えました。

また、研究情報誌『ECIFFO』の編集長を長年務められ、先進オフィスの調査・研究をなさっているオフィス

学会の岸本章弘氏に「変容するオフィスのデザイン」をテーマに世界のオフィスを紹介していただきながら、変わっていくオフィスワークと、これからのオフィスについてレクチャーをして頂くことにしました。

土曜日という悪条件の中、幸いにも「LINE office」(2017年度 第30回日経ニューオフィス賞〈クリエイティブ・オフィス賞〉受賞) および、シェアオフィス「LIFORK 大手町」を見学させていただけることになりました。LINEの山根脩平氏、NTT都市開発の東田中成佳氏をはじめとして多くの皆様にご協力いただき、充実した見学会を開催することが出来ました。ありがとうございました。

◆見学会に参加して

千葉工業大学 橋本都子

大会実行委員会の主催で、LINE officeおよびLIFORK 大手町の見学会が行われました。12:30に新宿駅南口に集合した後、JR新宿ミライナタワー23階のLINE officeを訪ねました。まず山根脩平氏 (LINE Space Design Team) より全体概要と諸室配置や空間デザインの考え方について説明がありその後見学を行いました。大規模執務空間において社員全員が必ず顔を合わせる場所を設けていること、様々なタイプや大きさの会議室が準備されていること等の説明があり、会議室の予約システムもタブレットを用いて効率化するなど、運営システムにも様々な工夫が凝らされていました。社内における写真スタジオやカフェの充実、ゲームラウンジやコミュニケーションラウンジの完備など、仕事の効率化と社員間の交流を促す工夫がされており、貴重な見学の機会となりました。

続いて準備されたバスに乗り新宿から大手町へ移動、LIFORK 大手町の見学を行いました。LIFORKとは、LIFEとWORKを合わせた造語で、時間と場所をフレキシブルに使い自分らしい働き方を実現したい人に向けた、新しいワークスタイルを提案する会員制のワークスペースです。はじめに岸本章弘氏 (WORKSCAPE LAB) より「変容するオフィスのデザイン」に関するレクチャーを頂き、その後随時見学を行いました。まるでホテルのラウンジのような高級感あふれる落ち着いた家具と心癒やされる観葉植物が配されたLIFORK 大手町は、コンシェルジュサービスがついた多様なワークスペースがあり、自転車通勤をサポートする駐輪スペースやシャワースペース等も完備、まさにこれからの新しい働き方を象徴するような場所でした。

東京の現在を象徴するような二つのオフィスの見学はとて充実した5時間となりました。お休みである土曜日の見学を快く受け入れて下さった関係者の皆さまに心より感謝いたします。

時間に普段あまり立入ることができない先端オフィスにお邪魔することができたのは、ひとえに粘り強く交渉

していただいた長山先生と休日返上でご対応いただいたLINE officeの山根さんのご協力のおかげです。

◆研究交流懇親会 担当：入澤敦子、木戸将人
東京のシンボルである東京駅が見える丸の内ビル5階の小岩井プレミナールにて研究交流懇親会を開催いたしました。会場として「最先端」を意識した会場をいくつか候補として挙げて下見を行ったりしてきましたが、会員の皆様に交流を深めていただく場として最も適していると考え今回の会場を選びました。

18時に直井大会長より開会のご挨拶をいただき、歓談・懇親の時をお過ごしいただいた後に見学会講師の岸本様より振り返りを行っていただきました。少し時間をおいて、高橋鷹志先生からご挨拶をいただいた後、各支部からの報告、卒業作品展を担当された高月先生からもここまでの経緯等をお知らせいただき、盛会のうちに懇親会は終了いたしました。

◆大会プログラム・研究発表梗概集制作

担当：拓殖大学・白石照美、東京電機大学・江川香奈
本大会では、発表の申込受付とプログラムの構成を担当しました。今年は10セッションに分け、構成しました。



見学会 (LINE office)



見学会 (LIFORK 大手町)



研究交流懇親会

プログラムの構成上、専門分野と若干異なるセッションでの発表となった方もいましたが、柔軟に対応していただき、この場を借りてお詫び申し上げます。また本年度は、発表者は発表に集中できるように、司会は大会発表者以外の方に担当していただきました。こちらでも若干専門分野と異なるセッションであっても、皆様、司会を快く引き受けていただきました。ありがとうございました。

例年に倣い、学生の発表が受賞審査の対象となるので審査結果集計の関係上、発表内容を優先しつつ、午前中に発表を集中させました。このため審査員の発表会場間の移動が頻発してしまうため、来年度からは発表内容に関わらず、学生枠のセッションを設けることも（教員と連番になる場合は別途検討が必要）検討されることが望まれます。

発表では活発な質問や意見交換が行われ、特に学生の発表では、質問以外にもコメント、アドバイスが多く出され、学生及び本学会にとっても、とても意義のある大会発表となりました。

■インテリア学講座

建築と室内空間の同時性：細い独立柱の空間

白鳥洋子（長岡造形大学 建築・環境デザイン学科 准教授）

はじめに

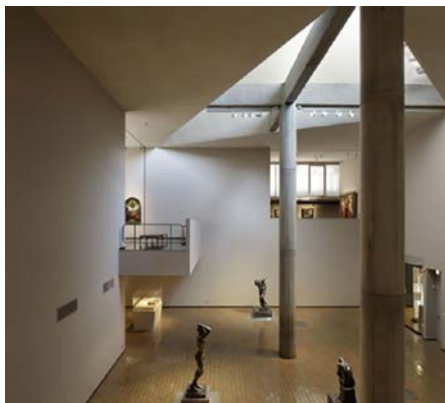
私が勤務する長岡造形大学も、学びを受けた東京藝術大学、エコール・ダルシテクチュール（旧エコール・デ・ボザール）も芸術系の教育機関であり、私は建築とインテリアを芸術やデザインの観点から見つめています。室内空間の基本的な骨格は、壁や柱、窓などの建築的な要素から定まり、室内空間は出来上がった建築に自然に現れる結果でもあります。本稿では、身近で自身に影響を与えた室内空間を取り上げ、フランスの近代建築の系譜を学ぶ機会に恵まれたこと、自然の光が差す細い独立柱の空間と縁があったこと、長年取り組むこととなった研究へと導かれた経緯についてお話しします。

国立西洋美術館19世紀のホール

大学時代の恩師である藤木忠善先生は坂倉準三建築研究所の出身の方で、上野公園にあるル・コルビュジェ設計の国立西洋美術館の実設計を担った方です。国立西洋美術館は2016年に世界遺産に登録されたことが記憶に新しいと思います。毎日、通学で前を通った建物であり、時折、先生から聞いていたル・コルビュジェと坂倉準三のエピソードが、後のフランス留学へと繋がっていたよ

うに思われます。国立西洋美術館では、展示空間の最後に現れる19世紀のホールが大変印象深く、清らかな美しさがあり、何度訪れても新鮮さがあります。藤木先生は、このホールの足場が取り払われ、空間を最初に見た時に成功を感じたとのことでした。19世紀のホールには中央に2本の独立柱があり、天窗から自然の光が降り注ぐ構成です。この空間は全体の平面においても中央に位置し、一種の求心性があり、それが力強さへと繋がっているように思いました。後に古代ギリシアの神殿を研究訪問する機会があり、ナオス（内陣）に入ったのですが、躊躇いを感じるような神秘性がありました。両者には独立柱の空間と光、神秘性において通じるものがありました。

一方、学生時代の住宅の設計課題は益子義弘先生が指導して下さい、配置の大切さ、心配りのあるプランニング、抑制の効いた意匠を私たちに教えて下さいました。後述する住宅の実設計の時にその有り難さを実感しました。



国立西洋美術館、19世紀のホール。独立柱の空間と天窗からの光。©国立西洋美術館

スイス館、パリ国際大学都市

修士課程修了後にフランス政府給費の奨学金を受けて、4年半パリに留学したのですが、ル・コルビュジェとは縁があり、光栄なことに彼の設計によるパリ国際大学都市スイス館（1930-1933）に住むことになりました。3年半住人として居住しましたので、深く記憶や感性に刷り込まれました。スイス館にはピロティ、サロン、シャルロット・ペリアンの設計による家具の個室、屋上のテラスなど魅力的な場所がたくさんあるのですが、本稿では1階のサロンとエントランスホールの空間についてお話しします。

1階のサロンとエントランスホールのヴォリュームでは石材、鉄筋コンクリート、鉄の三種類の構造材が使用されています。堅固な石造と鉄筋コンクリート造の壁面、飛行機の翼断面形状の太い柱が主に水平力を負担し、細い鉄の柱は圧縮力のみを負担しています。曲面は平らな面より構造的利点があり、これは意匠と実利を兼ね備えています。ル・コルビュジェ自身による壁画がここに描

かれていることも示唆的です。1階の様々な大きなガラス面は自然の光を室内に届け、同時に外の自然の風景や隣接する空間を視覚的に繋いでいます。こうした空間的な魅力は前述の構造の仕組みにより可能となっていて、このことは居住していた頃は気が付かなかったのですが、後の博士課程の研究の中で気が付くことができました。



ル・コルビュジェ、パリ国際大学都市、スイス館（1930-1933）、サロン。

納屋の家

パリから戻り、大学の勤務の傍らに住宅の実設計の機会がありました。愛知県北設楽郡にある昭和初期の納屋を若夫婦の住居に再生改修するという内容でした。北設楽郡は柳田国男の著書などで著名な、700年の伝統を持つ花祭が行われている地域であり、伝統的な集落の景観が今も残されています。既設は基礎の損傷が著しく、解体、組み立てを行う工事となりました。この納屋は登り梁の小屋組と船柁（セガイ）造りによる深い軒の出に魅力があり、全体的に材が細く、繊細な様相が好印象でした。これらを室内空間で生かそうと考え、小屋組を始めとする納屋の元々の軸組をなるべく残し、それを内部の露出とし、室内意匠となるように設計しました。

中央軸に柱が並ぶ幾何学的な平面の構成に特徴があります。この柱を残すには、使い勝手の観点からプランを収めるのに少々手間が掛かりましたが、この構成を残したことは正解でした。棟持ち柱が無事に空間に残りました。歴史的に見ると中央軸に棟持ち柱のある空間は古代の建築に見られ、原始の力強さがあります。時代が下る



筆者設計、「納屋の家」、北設楽郡、2001-2003年。

とともにこの構成の建築は少なくなっていく。中央軸上の柱は自然に棟を支え、左右対称にバランスを保ちながら屋根全体を支えています。傘に類する構造であり、簡潔な姿が魅力的であり、改修により吹き抜けや室内同士の開口からそれが見えることができるようになりました。空間の中で一筋の線となる柱の姿は凛としていて、同時に古代の香りがします。室内からは山々や自然の風景、木々の緑が見え、様々な光が室内に差し込むと空間はさらに輝きを増します。

アンリ・ラブルースト、分離構造と細い独立柱の空間

留学当初はル・コルビュジェをはじめとするフランスの近代建築を見つめていたのですが、博士課程の研究では一連のフランスの建築に流れる本質のようなものを求め、その源流を19世紀に遡りました。こうした探求の中で出会ったのはアンリ・ラブルーストであり、彼はサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館、パリ国立図書館で知られています。一般的に、早期に記念碑的な建築に鉄構造を露出で使用したことにその意義が認められています。研究を進めるとアンリ・ラブルースト、ジュリアン・ガデ、オーギュスト・ペレ、ル・コルビュジェ、坂倉準三、藤木忠善、白鳥洋子の順で師弟関係があることが分かり、運命を感じました。ラブルーストの作品はどちらの図書館も室内空間が大変美しく、鉄構造が内部に露出しています。それが意匠的な効果を持ち、空間の中に細く繊細な鉄の独立柱があることに特徴があります。これは「箱入れ構造」と呼ばれる仕組みからなり、堅固な石造の箱の中に繊細な鉄構造を優しく入れるという考え方です。その繊細な機構から「時計構造」とも呼ばれています。堅固な石造の壁面が風圧などの水平力を支え、内部の細い鉄の柱は屋根などの垂直荷重のみを支えています。

ル・コルビュジェは独立柱についてラブルーストと同様の発想をしているのですが、両者の間をジュリアン・ガデとオーギュスト・ペレが繋いでいます。博士論文では、「箱入れ構造」とそれによる独立柱の空間の着想は、ラブルーストが在ローマ・フランス・アカデミーの奨学生としてローマに留学中、1828年に行った南イタリアのパエストゥムの古代ギリシアの三つの神殿の研究にあったと結論付けました。実際に古代ギリシアの建築を訪れると、南イタリアの神殿もギリシア本土の神殿も大変素晴らしく、廃墟になっても人の心を惹きつける美しさや力強さがありました。特に二重のオーダーは石造とは思えない程の軽やかさであり、それが連続するナオスは大変新鮮でした。18世紀、19世紀ではエコール・デ・ボザールの建築家たちが、20世紀ではル・コルビュジェが古代ギリシアの神殿を訪れ、デッサンや著書を残しているのですが、その気持ちを良く理解することができました。



アンリ・ラブルースト、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館（1843-1850, 51）、2階大閲覧室、断面詳細図。©BSG, BNF.



ヘラ第一神殿（バシリカ）、パエストゥム、紀元前540年頃。

まとめ

現在、取り組んでいる細い独立柱の空間の源流に関する研究は、様々な偶然から辿り着いたのですが、概して、これは古代ギリシア、18世紀、19世紀の先駆的な建築、20世紀の近代建築など、各時代に時折現れて、新鮮さを発しながら同時に原始の力強さと神秘性を私たちに伝えているように思われます。一方、構造の仕組みと関わっていることから科学的な側面も有しています。細い独立柱の空間は古代から人々が創り、構造的な感性を必要としています。また、しばしば、自然の光とともに美しさを高め合う姿を見受けます。これは建築と室内空間が高め合う関係や両者の同時性を実感する好例であり、建築の最後に現れる室内空間の豊かさや表現力の大切さを示しています。

謝辞

学部時代から励まして下さっている藤木忠善先生、フランス留学の時から助言をいただいている三宅理一先生、博士論文のご指導いただいた鈴木博之先生、伊藤毅先生、そして、本稿の機会を下さったインテリア学会理事、棒田邦夫先生に心から感謝を申し上げます。この研究はJSPS科学研究費補助金（科研費）の助成を受けています。基盤研究（C）、17K06749、『パリ国立図書館における分離構造と細い独立柱の空間の源流』。This research was supported by JSPS KAKENHI, Grant Number 17K06749, Grant-in-Aid for Scientific Research (C).

表具師が考案した金沢からかみをホテル内装に採用

石黒鳴子（積水ハウス株式会社）

概要

2019年4月にオープンした眠音 礎（ねおん いしずえ）ホテル。金沢市民の台所である近江町市場に隣接する、一日二組限定の素泊まり宿です。インテリアの見どころは、『金沢からかみ文様』の壁面装飾。京からかみ・江戸からかみにならい、金沢らしいデザインを開発したのは、金沢からかみ研究会に所属する金沢表具の職人たち。伝統を守ることは、革新を続けること。その遊び心あるデザインは、新築の現代空間に「アート」として融け込みます。金沢からかみを中心に、金箔や桐工芸の照明・オブジェ・和紙アート等、地元の伝統工芸品で設えました。

また、NPO法人金沢アートグミから紹介いただいた、若手アーティストによる作品も展示。建物全体のテーマは雪月花。エントランスには帳簿台として床脇の違い棚を造作し、「おあつらえ」感ただよう空間としました。

素材と出会い

「インスタ映え」「インバウンド」これらのキーワードを盛り込んだホテルをつくる上で、デザイナーが重要視したのは、「目新しさ」と「金沢らしさ」という地元独自のオリジナリティ。金沢市長のブログで紹介されていた、「金沢からかみ」に注目したのがきっかけでした。

現代空間に伝統工芸を取り込むための工夫

金沢ゆかりの文化と風土をモチーフにした金沢からかみ。それをさらに洗練された印象するために工夫したのは、色数を減らし、シルエットの美しさを強調すること。和紙はグレー、文様は雲母のシルバーに統一。インテリアの基本色もブルーグレーに白木というシンプルなコントラストで和モダンなテイストを加速させます。ベースカラーで彩りを抑えた分は、和模様のカラフルクッションでアクセントをプラス。金沢のかわいらしさも表現しました。また、設計段階から鴨居や窓、建具の上端・下端のレベルを揃える事に徹底することで建築線の数を出来るだけ減らすことに成功。まるで額縁の中にアートを収めたかのような仕上がりとなりました。

「目覚めをデザインする」ホテル運営会社「眠音」設立

眠音（ねおん）は、金沢市の老舗布団店と民泊運営会社と積水ハウス（株）北陸シャーマゾン支店とが協力して設立したサテライト式のホテル運営会社です。質のよい眠りを提供する上では質のよい布団がまず必要ですので老

舗布団店が提供。それだけではなく空間そのものが快適であることが重要です。リノベーションでは難しい高気密高断熱で最新の設備を兼ね備えた空間を積水ハウスが新築して提供します。更に、食事を楽しむことでよい眠りにつながるとの考えから、地元密着型の民泊運営会社が、お客様ひとりひとりに合わせた食事処を紹介し、提携のお店ではお得に食事を楽しむことができ、素泊まりだからこそ味わえる魅力となるでしょう。

大人数で泊まれる簡易宿所く賃貸マンション

積水ハウスホテル事業が2年ほど前から本格的に始まり、京都や福岡での実例が少しずつ増えてまいりました。2015年金沢に北陸新幹線が開通したことがきっかけで、金沢では賃貸マンション経営よりもホテル経営をしたほうが収益があがるのでは？との考えが出てきました。

照明計画

ダウンライト・ゼロで直接光源を見ることなく、お客様にリラックスして過ごしていただく空間を提供するよう努めました。折上げ天井として全体照度を確保。その場合に気をつけたのは、火災報知機が天井の中心に配置されて照明で照らされないようにすることです。スタンドライトで夜に過ごすあかりを確保します。ひかりだまりを下にもっていくことで落ちついた印象としました。客室入り口は金沢金箔のブラケット照明で計画しましたが、竣工検査で足元の照度が不足していると社内指摘がありましたので、ダウンライトを追加する手なおしが発生しました。ホテルは特に窓が少なく壁紙の色を落ちついたトーンにまとめることが多いため、暗い印象を与えがちかもしれません。洗面所やトイレには温白色のあかりで清潔感のある印象をだす工夫も必要に感じます。

反響

ホテルがオープンして1カ月。ゴールデンウィークも過ぎたところでbooking.comのクチコミで検証しました。

- ・スタッフ 9.7
- ・施設・設備 9.7
- ・清潔さ 10
- ・快適さ 10
- ・お得感 9.7
- ・ロケーション8.4（詳しいホテル案内図が必要）

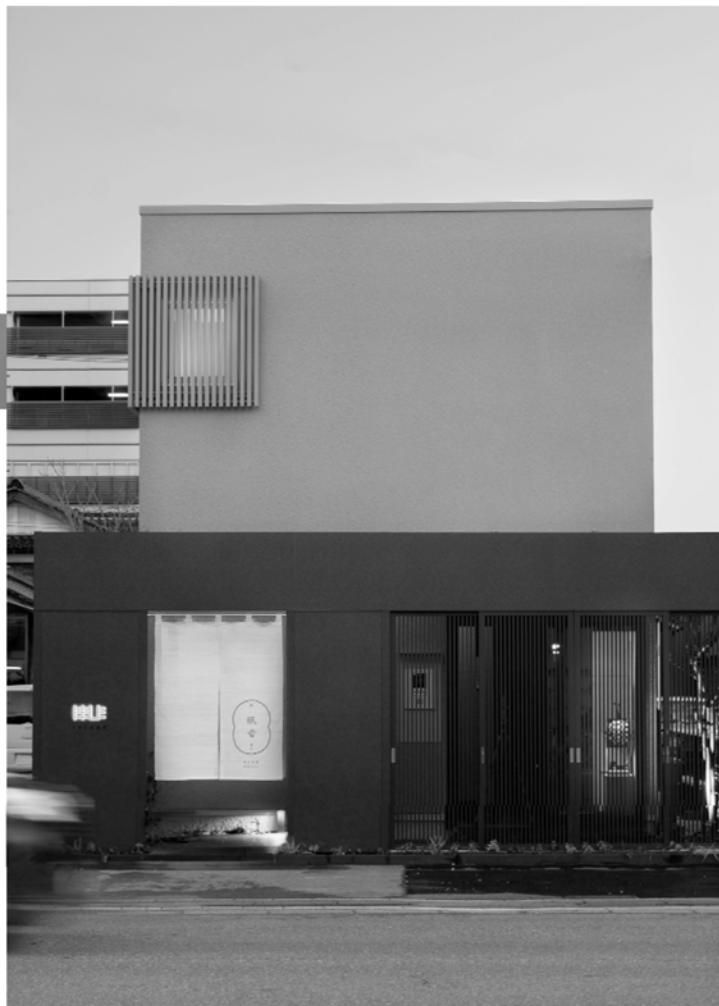
いしかわインテリアデザイン賞2019で、金沢市長賞をいただくこととなりました。「金沢からかみ」を宿泊施設に採用したことが大きな要因だそうです。今後も地元の職人さんと協力して積極的なものづくりをしてゆきます。

金沢からかみ文様

襖や障子の装飾として日本の住環境を彩る「からかみ」。

元来、中国から輸入された美術紙の総称であったが、中国の木版印刷による「紋唐紙」を模造するために日本の伝統的な文様をあしらったのがはじまり。空間を演出し、その部屋の個性や雰囲気を出す「からかみ」には、さまざまな文様が編みだされてきた。

「金沢からかみ」とは、金沢ゆかりの文化や風土をモチーフに、金沢表具職人の若者が自ら手で図案化した文様集である。



「眠音 礎」ホテルファサード

文化の発信

インテリア建材として簡易宿所に金沢からかみを採用した実例「眠音 礎」ねおん いしずえホテル（平成三十一年一月竣工）。金沢市武蔵町に位置するため、近江町市場へのアクセスが良い。敢えて素泊まりとし宿にキッチンを備え付けると、ターゲットは外国人旅行者の他に、女子会など地元の人々が飲み会の二次会に利用するケースも想定する。

「インバウンド」と「インスタ映え」に注力した宿だ。この空間に金沢からかみを採用することで、国内外へ向けて表具師の新たな挑戦を認知していただく機会を増やすことをねらう。



業界振興の仕掛け

ここからは次なるビジョンをモデルプランで説明する。旅先でのアクティビティ：体験することは今や世界的に流行している。モノ以上にコト・ココロの充足が求められる時代にあたり、宿泊施設でも体験型イベントをはじめ様々な工夫がなされている。サテライト方式のいわゆる無人ホテルでも旅行者の欲求を満たすことは可能であろうか。まずは説明書きを宿に常設する。

金沢からかみは表具師による手しごとであり、その手しごとを体験できる場所が金沢職人大学校である。例えば、そのような事がQRコードを媒介にネットアクセスできれば、SNSを介して拡散も可能であろう。



2F 「雪 -YUKI-」 6名様まで宿泊可



1F 「月 -TUKI-」 4名様まで宿泊可



金沢職人大学校

伝統は革新の連続。襖紙からアートへ。新たな価値の創造。触れるという魅力。

新たな試みとして表具でははく内装材として壁に張り込む施工とした。からかみをアート位置付けベッドヘッドの装飾とする事で手に触れ体感できるように。



データ

簡易宿所「眠音 礎」
 所在 ねおん いしずえ 金沢市武蔵町
 予約サイト book11g.com 楽天トラベル

金沢からかみ採用文様
 月の間・木虫籠に月、金沢雪の間・雪吊、加賀てまり

敷地面積	86.90㎡
1F床面積	48.37㎡
2F床面積	48.37㎡
延床面積	95.00㎡
建築面積	48.37㎡
都市計画区域 用途地域	商業地域

完成 平成三十一年一月
 設計・施工 積水ハウス(株)
 インテリアデザイン 石黒鳴子
 協力 金沢からかみ研究会

蓮
加賀れんこん

源
源助だいこん

胡
加賀太きゅうり

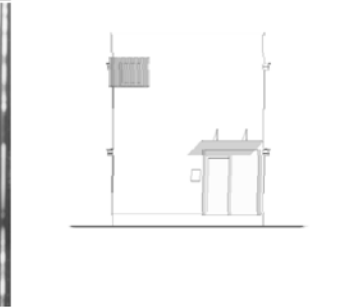
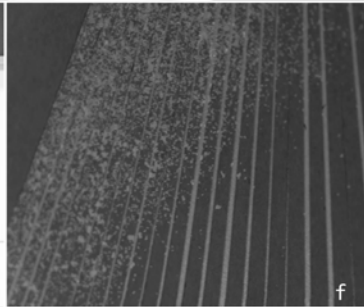
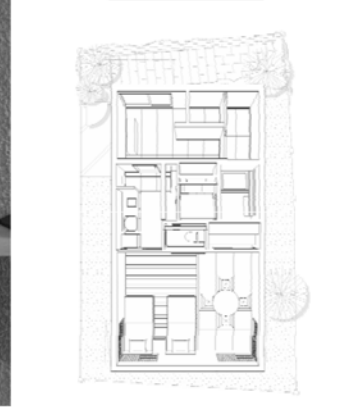
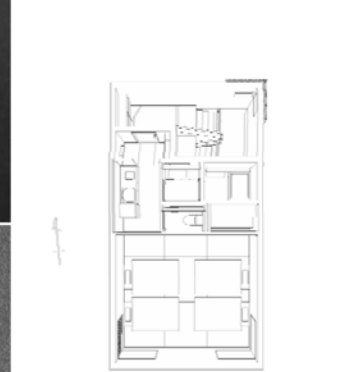
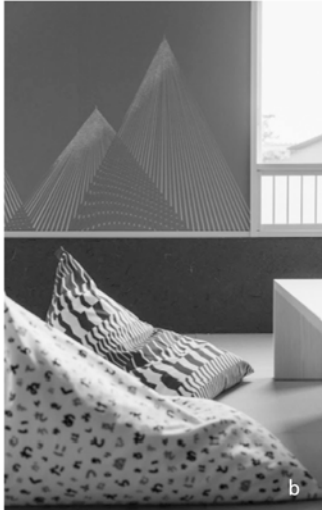
春
金沢春菊

サ
さつまいも

葱
金沢一本太ねぎ

苺
金時苺

南
打木赤皮甘栗がぼちや



- a. 「眠音 礎」ロゴデザイン
- b. sousouクッション座椅子
- c. 和紙あさくらデザインパネル
金沢ゆかりの若手作家アート
- d. 加賀てまり金沢からかみ
- e. 桐工芸ミツブライト
- f. 雪吊り金沢からかみ
- g. 檜風呂のような最新設備
- h. 亀甲名栗フローリング

芦
せり

茶
二塚からしな

茄
へた紫なす

豆
加賀つるまめ

葱
くわい

筍
たけのこ

苺
赤ずいき

かなざわ
かわい
からかみ
もんよう

■委員会だより

□総務委員会

委員長 白石光昭（千葉工業大学）

総務委員会に新しい委員が参加されましたので、総務委員会のメンバーを紹介します。

直井英雄 会長
加藤 力 副会長
西出和彦 副会長
上野義雪 副会長
白石光昭 総務委員長
棒田邦夫 総務委員
松崎 元 総務委員
江川香奈 総務委員
曾根里子 総務委員

□国際委員会

委員長 ペリー史子（大阪産業大学）

今回はありません。

□論文審査委員会

委員長 渡辺秀俊（文化学園大学）

今回はありません。

□広報委員会

委員長 棒田邦夫（金沢学院大学）

広報委員会のメンバーは、清水隆宏氏（岐阜工業高等専門学校）・松尾兆郎氏（穴吹デザイン専門学校）・小俣祐樹氏、井上貴司、西岡基夫、私棒田邦夫の6氏であります。この6氏で毎回ローテーションを組んで年3回の会報発行を行っております。会員の中でこの会報に携わっていただける方を募集しております。役割としては

各委員会、各研究部会、各支部および会長ご挨拶、事務局連絡などの記事の執筆依頼をお願いして、集まった原稿を正文社へ送付します。編集は正文社が行っていただけるので、校正のチェックを全委員で確認して印刷をお願いするだけです。手のかかる作業はございませんので、ご協力のほどよろしく願いいたします。また、会報第67号に掲載します「インテリア学講座」の原稿を募っております。原稿の内容は、日頃思っている、考えているインテリア、自分の考えるインテリア論を気軽に書いていただければ結構です。施行事例の作品でも大丈夫ですので、ご投稿お待ちしております。

□表彰委員会

委員長 高月純子（女子美術大学）

今回はありません。

□アーカイブ化委員会

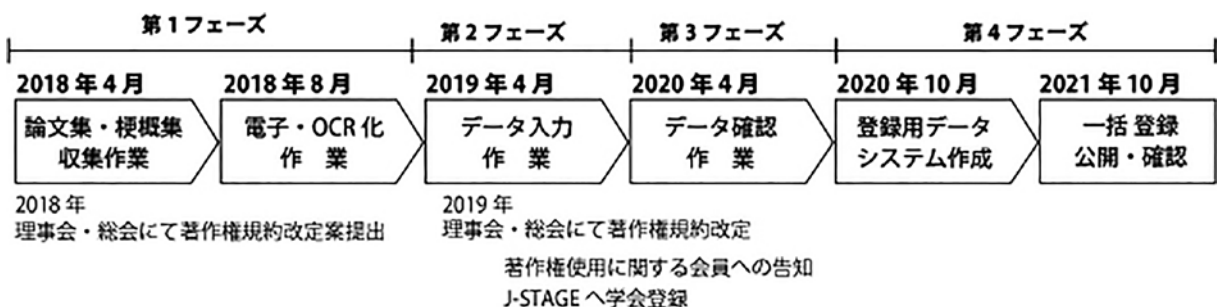
小宮容一（芦屋大学 名誉教授）

井上 徹（芦屋大学 特任准教授）

日本インテリア学会30周年記念事業として、「論文集・梗概集のアーカイブ化」を目的にアーカイブ化委員会を発足し、4年間掛けて30年分のアーカイブ化を行う事となりました。（予定表を参照）

2018年度は、会議を4月と8月に行いました。活動は、第1フェーズとして、論文・梗概集の収集作業を行い、電子化作業・OCR化作業を中心に行いました。作業はボランティアスタッフも使って行っております。論文・梗概集の収集には、直井会長を始め理事・学会員の皆様にご提供等多大なご協力を頂きました事この場を御借りして御礼申し上げます。2019年度は、第2フェーズに入り、データ入力・原稿チェック作業を中心に行う予定です。また、同時に著作権原案作成・登録準備書類の作業も行う予定です。そこで著作権原案作成や他学会で以前アーカイブ化の経験やJ-stage登録を利用された先生がおられましたら、ご助言・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。その他アーカイブ化作業にご協力頂

■アーカイブ化予定表



ける学会員様は、メール：jk@jasis-kansai.jp（井上）
まで連絡のほどよろしくお願ひ申し上げます。

■ 研究部会だより

□ 歴史研究部会

部会長 河田克博

今回はありません。

□ 人間工学研究部会

部会長 白石光昭（千葉工業大学）

今回はありません。

□ 教育研究部会

部会長 金子裕行（千葉県立市川工業高等学校）

今回はありません。

□ 期限付き研究部会

今年度の期限付き研究部会の応募と審査結果について

部会長 西出和彦（東京大学）

2018年10月に応募が締め切られた今年度開始の期限付き研究部会は、下記の2部会の応募があり、研究部門において審議された結果、期限付き研究部会として認められることになりました。

研究部会テーマ：甲子園ホテル・帝国ホテル比較研究部会

代表者 黒田智子

研究部会テーマ：インテリア教育研究部会

代表者 藤原美樹

■ 支部だより

□ 北海道支部

支部長 小澤 武（小澤建築研究室）

今回はありません。

□ 東北支部

支部長 早野由美恵（東北芸術工科大学）

東北支部におきましては、平成31年2月6日、支部総会及び、見学会を山形県山形市 東北芸術工科大学にて開催しました。

まずは、東北芸術工科大学で開催中の卒業制作展を、各々の時間にあわせて見学して頂きました。

東北芸術工科大学は、東北、山形の雄大な自然と独自の文化のなかで、地域との連携をはかりながら新しいスタイルの大学を目指している大学です。そして卒業展覧会は、その集大成として学生達の力作が展示され、県内外の大学関係者や企業の方々、一般の方々も毎年多数見学にいらしていただきます。

しかし、毎年懸念されるのは雪による交通の影響です。今年は幸いなことに雪も少なく、見学会、総会も滞り無く開催出来ました。

その後は場所を同敷地内のプロダクト研究棟会議室へ移動し、本年度の事業報告と決算報告、次年度の事業計画案と予算案が審議され原案通り承認されました。

交流会は市内の「くみぜん」で行われました。地元産の素材を使い、先代から山形のメディアでも取り上げられるこだわりのレストランです。そこでも様々な意見が出され、盛況のうち閉会となりました。



東北芸術工科大学卒業制作展風景



支部総会 風景

□関東支部

支部長 内田和彦 (株オカムラ)

今回はありません。

□東海支部

支部長 河辺伸二 (名古屋工業大学)

今回はありません。

□北陸支部

支部長 棒田邦夫 (金沢学院大学)

日本インテリア学会設立当時より学会の理事として運営・事業に参画し、北陸支部の支部長としても北陸の会員を鼓舞し続けていただいた小松暁一氏が平成31年4月24日にお亡くなりになりました。87歳の生涯でした。奇しくも87歳の誕生日にお亡くなりになられたそうです。

設立から30年の歴史の中で当初は関西支部の一員であった北陸が、小松暁一氏の働きによって北陸支部として独立を果たし、大会においても第9回大会、第21回大会、第27回大会と3回金沢で行うこともできました。これも偏に「学会の火を消すな!」という強い意志の現れであったように思います。北陸支部会員一同、感謝の気持ちで一杯でございます。

小松暁一先生これまでのご助言、ご指導ありがとうございました。

この後は天より私たちを見守っててください。ご冥福をお祈りいたします。

□関西支部

支部長 片山勢津子 (京都女子大学)

今回はありません。

□中国・四国支部

支部長 谷川大輔 (近畿大学)

今年の第31回大会は広島にて下記のとおり開催いたします。詳細は同封の「日本インテリア学会第31回大会開催概要」をご覧ください。

- 日程：2019年10月26日 (土)、27日 (日)
 - 10月26日 (土) 見学会・研究交流懇親会
 - 10月27日 (日) 研究発表・卒業作品展・記念講演会
- 日本インテリア学会第31回大会事務局
事務局：近畿大学工学部
TEL：082-434-7000 FAX：082-434-7011
E-mail：tanikawa@hiro.kindai.ac.jp (谷川)

多くの会員のご参加をお待ちしております。

□九州支部

支部長 森永智年 (九州女子大学)

支部活動としての報告ではありませんが、5年前に九州支部で見学会を開催したJR門司港駅の文化財保存修理事業が完了し、7年振りに今年の3月にグランドオープンしたので、その紹介をいたします。

門司港駅は1914年(大正2年)に鉄道駅舎として新築されたもので、東京駅と同じ年の完成となります。一等駅舎としては1988年に日本で初めて国の重要文化財に指定されました。外観はネオルネサンス様式を基調とし、マンサード屋根の木造2階建ての中央棟と東西棟からなり、九州の玄関口として年間880万人の人が利用した駅として賑わいました。マンサード屋根は急勾配の天然スレート葺きで、緩勾配部分は金属板瓦葺きとし、各所にドーマ窓が設けられています。外壁は平瓦を垂直にはりまわし下地とし、石張り風のモルタル塗り仕上げとなっています。

今回の保存修繕では創建当初に復元することを基本方針として進められました。その結果、外観は昭和4年に駅舎の玄関口に車や人力車が付けられるよう大型の庇が増築されたものが撤去され、屋根飾りが復元されました。



文化財保存修理事業が完了した門司港駅
写真：photoAC提供



観光案内所の背景にある飾り壁
写真：photoAC提供

た。内装も壁紙や壁飾りが文化財保存修理事業の過程で発見され、当時の姿に復元されました。現在は、1階の待合室と2階の食堂や貴賓室が当時の姿に蘇り、1階の旧1、2等待合はみどりの窓口と観光案内所に、旧3等待合所がスターバックコーヒー店になっています。また、2階の貴賓室と食堂はみかど食堂がオープンしています。ただし、中央棟の屋根の大時計（大正7年九州最初の電気時計）は創建時にはなかったものですが、門司港駅の正面のシンボルとして残されています。

近くへお越しの折には、門司港レトロ地区の玄関口に大正時代の装いをまとって再登場した門司港駅へ是非お立ち寄りください。

■事務局より

棒田邦夫（金沢学院大学）

2019年度（令和元年度）日本インテリア学会総会のご案内

1. 日時 2019年（令和元年）6月8日（土）
13：30～15：00
2. 会場 千葉工業大学津田沼校舎7号館1階FWS
（フレキシブルワークスペース）
（千葉県習志野市津田沼2-17-1）
<http://www.it-chiba.ac.jp/institute/campus/tsudanuma.html>
3. 交通 JR総武線「津田沼」駅下車
南口徒歩5分
<http://www.it-chiba.ac.jp/institute/access/index.html>

4. スケジュール

- 1) 総会（7号館1階フレキシブルワークスペース）
13：30～14：30
- 2) シンポジウム 15：00～16：30
「インテリア産業・インテリア学の領域とその接点」
～教育・実務・資格を視点に～

趣旨：これまでに住まいや店舗デザインに重きをおいていたインテリアデザインの領域がホテル、オフィスなどに広がりつつあります。インテリアデザインの現況と今後の方向性について、実務の立場からご提言をいただき、学会としての在り方、役割を模索し、東京オリンピック・パラリンピック、大阪万博などの開催を契機に学会としての意識改革に向けてのシンポジウムと考えております。本シンポジウムに向けて、昨年

度の東京大会では、日本オフィス学会会員、岸本章弘様のご尽力により「最先端オフィスのインテリア見学」と題して見学会を実施いたしました。

①「インテリア産業の現況と課題」

講演1：渋谷忠彦 様

公益社団法人 インテリア産業協会 会長
三井デザインテック株式会社 代表取締役 社長

②「オフィス・インテリアと経営戦略について」

講演2：今泉嘉久 様

日本オフィス学会 理事
一般社団法人 日本オフィス家具協会 副会長
プラス株式会社 代表取締役 会長

③「産官学における学会の役割 -ご講演1、ご講演2を受けて-」

意見交換：直井英雄 様

日本インテリア学会 会長
東京理科大学 名誉教授

- 3) 研究交流懇親会（7号館1階フレキシブルワークスペース）
16：50～18：30
（会費：3,000円 当日受付にて申し受けます）

5. 理事・評議員会

同日11:00より理事会・評議員会を開催いたします。理事・評議員の方はご出席ください。
（7号館1階フレキシブルワークスペース）

また、事務局が金沢に移転して1ヶ月半となりました。会員のみなさまにはご迷惑ばかりおかけしており、大変申し訳なく思っております。

つきましては、電話対応をお願いしております伊藤様は学会のことにまだまだ不慣れでございますので、スムーズな対応を提供するために電話の取り次ぎ曜日と時間を下記のとおり決めさせていただけないでしょうか。
毎週の月曜日または金曜日の10時～16時の間
どうかご協力のほどよろしく願いたします。

■ 編集後記

広報委員長 棒田邦夫（金沢学院大学）

この号では、主に総会の案内通信としての活用と、例年の大会に中々参加できずにいる会員のみなさんへの研究報告の場として利用してもらう「インテリア学講座」を掲載しております。今回は長岡造形大学の白鳥洋子先生、積水ハウス北陸支店の石黒鳴子様に執筆をお願いしました。時間に余裕がないにも関わらず執筆いただき感謝申し上げます。心よりお礼申し上げます。次回の「インテリア学講座」は第67号に掲載予定でございます。会員の皆様、特に学会に入会したばかりの方々にはぜひ執筆投稿をお願いしたいと存じます。この「インテリア学講座」は大会発表前の思い描いていることでもよいと思っており、その積み重なり的一端に活用してほしいと

考えております。どうぞ気軽に自分の思いなどをお聞かせください。

■日本インテリア学会会報第64号（2019. 5. 25発行）

編集者： 棒田邦夫

発行者： 直井英雄（日本インテリア学会会長）

広報委員会： 棒田邦夫（委員長）

井上貴司、小俣祐樹、清水隆宏、

西岡基夫、松尾兆郎

e-mail : k-bouda@kanazawa-gu. ac. jp

■事務局

日本インテリア学会 事務局 伊藤、棒田

〒920-0941 石川県金沢市旭町1-25-25

電話：080-2386-5652 FAX：076-262-6530

e-mail : jimukyoku@jasis-interior. jp